

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一10:14~22 「偶像礼拝を避けよ」

[14] 「ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい」

ここでは偶像礼拝は不品行と同じく避けるべきものであることが教えられる。→6:18

[15-16] 「私は賢い人たちに話すように話します。ですから私の言うことを判断してください。私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。

私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか」

パウロはなぜ偶像礼拝がいけないのかを示していく。これはクリスチャン生活の核心に触れることなので、愚かな者にならないで賢く判断してほしいと願う。彼は16節でイエス・キリストを信じる者に定められた聖餐式のことを引用する。イエス・キリストは十字架につけられる夜、最後の晩餐の席上で弟子たちにパンとぶどう酒を分け与えられた。これは十字架上で裂かれたイエスの体と流された血とを表わすものであった。これ以後弟子たちはこれを聖餐式として守り、その救いの恵みを確認し、救い主イエスの苦しみを思う礼典としたのである。それゆえ信仰者はこの聖餐式のたびごとにイエス・キリストによる尊い救いを思い、その恵みのうちに救われた者としてのすばらしい立場を確認させられ、新たな献身の思いを持つのである。

[17] 「パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの方がともに一つのパンを食べるからです」

聖餐式のパンは一つのパンを裂いて多くの人に分け与えるものであり、そのように皆がともに一つのパンを食べることによって、キリストにあって一致し、一つとされる。多数であっても一つのからだ。これが教会の特徴なのである。

[18] 「肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。供え物を食べる者は、祭壇にあずかるではありませんか」

「肉によるイスラエル」とは先祖アブラハム以来のイスラエル民族のこと。彼らは律法の定めに従って、祭壇に供え物をし、ささげ終わった後のその供え物の一部を食べた。これは神との交わりにあずかるということの意味する。同様に神の定められた聖餐式にあずかり、パンと杯をいただく者は神との親しい交わりの中に入れられているのである。

[19-20] 「私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。いや、彼らのささげる物は、神にではなく悪霊にささげられている、と言っているのです。私はあなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません」

パウロはすでに8:4節で「唯一の神以外には神は存在しない」と教えた。しかし彼はここで偶像礼拝の底にうごめいている深い存在を指摘する。存在しないものをあたかも存在するかのよう錯覚させ、人々を真の礼拝から引き離すもの、それは悪霊である。真の神に敵対する存在としてのサタン、そしてその配下の悪霊が確かに存在する。彼は偶像にささげられたものは実は悪霊にささげられているのであり、その宴会にあずかる者は悪霊と交わるのだと言い、そのような者になってもらいたくないと警告する。

[21-22] 「あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できないこ

とです。主の食卓にあずかったうえ、さらに悪霊の食卓にあずかることはできないことです。それとも、私たちは主のねたみを引き起こそうとするのですか。まさか、私たちが主よりも強いことはないでしょう」

ここでパウロは「主の杯を飲み、主の食卓にあずかる」者、つまり主と交わりを持つ者は、「悪霊の杯を飲み、悪霊の食卓にあずかる」ことはできないと教える。神と交わり、また悪霊と交わるという二股をかけることはできない。それゆえ主と交わりを持つ者、クリスチャンは偶像礼拝に連なるあらゆる行事から離れていなければならないのである。最後にパウロはコリント人たちに向かって、あなたがたがいくら強い、賢いといっても、まさか主より強いことはないでしょう、とダメ押しをする。偶像礼拝をし、悪霊と交わるならば、かつての出エジプトのイスラエルの民のように主のねたみを引き起こし、滅ぼされてしまうかもしれない。

クリスチャンは主イエス・キリストにあって新しい恵みにあずかっている者である。それゆえそのすばらしい立場をわきまえ、偶像礼拝あるいはそれに関する不品行を拒絶して天地万物の創造主である真の神の前に真実に生きなければならない。